

主 文

原判決を破棄する。
被告人を罰金参千円に処する。
右罰金を完納することができない場合は、金百五拾円を一日に換算した
期間被告人を労役場に留置する。
原審において生じた訴訟費用は被告人の負担とする。

理 由

検察官の控訴趣意は、記録に編綴されている福岡高等検察庁検察官長富久提出の
控訴趣意書記載のとおりであり、弁護人牟田真の答弁は記録に編綴の弁護人大曲実
形提出の答弁書に記載のとおりであるから、いずれもこれを引用する。

同控訴趣意（法令適用の誤）について、

論旨は、本邦に在留する外国人が居住地を変更した場合にはすべて新居住地の市
町村の長に対し、登録証明書の居住地の記載の書換を申請する義務があるのであ
つて、外国人登録法第八条第二項の居住地書換申請の期間について、「前項の届出を
なしたとき」から起算する旨の規定は、同条第一項でその書換申請義務を確実に履
行せしめるため、予め居住地変更届をなすべきことを定めたので、その変更届がな
さるれば、その時に変更の意思が確定したものと見えるので、居住地変更の意思が
確定したときを起算日とする趣旨で、その典型的な場合として「該変更届をしたと
き」としたものであり、居住地を変更しながら該変更届をしない場合には、届出以
外の表示方法により生活の本拠を新居住地に移す意思が確定されたときを起算日と
することを包含するのであるから、本件のごとく、変更届をなさずして、居住地
を変更した場合にも、該変更の意思が確定した日から起算し、所定期間内に新居住
地の市町村の長に対し、前記書換申請を為すべき義務があり、その期間を懈怠する
以上同条第二項違反の罪責を免れないと主張するにある。ところで原判決において
は、被告人が本邦に在留する外国人であつて、昭和二十八年十二月末日頃下関市
町b丁目c番地から長崎県下県郡d村大字e字fにその居住地を変更しながら昭和
二十九年三月一日迄、前居住地の下関市長に対し居住地変更届書を提出せず、新居
住地のd村長に対し居住地の記載の書換を申請しなかつた事實は認め得られるも、
外国人登録法第八条第二項の書換申請は、同条第一項の変更届を条件とし且つこれ
を了したときから起算して十四日以内になすべきことが規定されているのであつ
て、前居住地の市町村の長に対し変更届を了らない以上、登録証明書の居住地の記
載の書換は無期限に留保されるものと解すべきであるから、被告人のごとく、前
第一項の変更届を怠っているかぎり、事実上居住地を変更し、その変更した日か
ら所定の期間内に第二項の書換申請をしなかつたとしても、同項違反の罪を構成し
ない旨判示していることは原判決自体により明らかである。

よつて按ずるに、外国人登録法は在留外国人の公正な管理に資する目的で、その
居住関係及び身分関係を明確ならしめるべく本邦に在留する外国人の登録を実施す
るものであること従つて居住地を変更した場合は速かにすべて新居住地の市町村の
長に対し登録証明書の居住地の記載の書換を申請すべき義務を課しているのであ
つて、このことは外国人登録令施行当時と異なるところはない。ただ同法第八条にお
いては、同令第七条といささか異り、居住地の変更に伴う居住地の記載の書換の手続
について、一の市町村の区域内で居住地を変更した場合と、一の市町村から他の市
町村へ居住地を変更した場合とに分けそれぞれ別の項に規定しておるのであるが、
その別個に規定した所以のものは後者の場合には、その書換申請を受けた市町村に
おいては、当該外国人の登録原票の備付がなく、前居住地の市町村よりこれが送付
を受けねばならない関係からして、前者の場合のごとく、書換申請自体によつて申
請事項を審査し、その真実であることを確認することは容易でなく、且つ登録原票
及び登録証明書の記載の更正をすみやかにし難い事情にあるので、それ等の不
都合を可及的に除去し、さらにより一層書換申請義務を確実に履行せしめ、二重登録
乃至は登録と現実との不合致の存することのないようにとの特段の配慮から特に同
条第一、第二項のごとき規定を設けたことが推測される。かかる見地か〈要旨〉ら考
察すると、同法第八条第二項が居住地の記載の書換申請は、同条第一項の居住地の
変更届をしたときから〈要旨〉起算し十四日以内になすべきものとした律意は、該変
更届がなされる場合については現実の変更に先立つその届出をしたときから、おそ
くとも現実に居住地を変更したとき直ちにその届出のときから起算して十四日以内
に、新に居住しようとする市町村の長に対しこれを為すべきことを規定したと同時
に、その変更届が履行されない場合については、その届出をなすべきときから
起算して十四日以内にこれを為すべき趣旨、換言すれば、現実に居住地を変更した

よつて主文のとおり判決する。

(裁判長判事 筒井義彦 判事 柳原幸雄 判事 岡林次郎)